



地盤マスター
畑野と山本が見た
能登半島の現状を
お伝えします!

畑野

山本

能登半島地震から1年
半が経った6月27日・28日、
西日本住宅地盤事業協同
組合の皆さんと共に、弊社
山下そして地盤事業部の
畑野と山本が被災地再視
察へ参加して参りました。

1日目は金沢市内灘町の
液状化被災地域・輪島大
規模被災地・地滑り被災地、
2日目には七尾市・珠洲市
飯田港・珠洲市津波・豪雨
被災地を視察する工程の
中で感じたのは、避難所は
すべて閉鎖され復興に向
けたフェーズに入ったと
されているものの、被害が
大きすぎるためか、まだまだ
日常を取り戻せていない
場所が多く残っているとい
うことです。



震災後から何も手付かずの状態

能登半島視察 2025 地盤編

地盤マスターの2人が行く！

技術者として能登へ再視察にいきました

2 こちらは液状化により
校庭の地面が下がってしま
っています。公共施設で
地盤改良がされているため
建物自体の被害は少なく、
周囲の被害が大きく見え
ます。



1 築30年以上経過した住
宅の被害。全体で液状化
現象が起こり、この建物は
液状化中に地滑りして本来
の位置より1mほど道路側
へ移動したと考えられます。
見て分かるように、今も建
物の一部が浮いています。

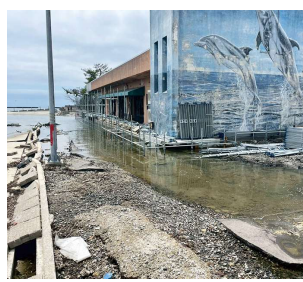
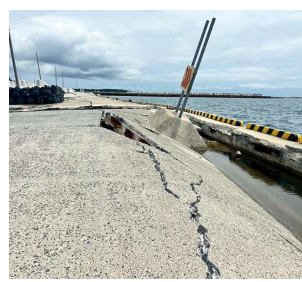


3 最後に隆起と液状化に
よって傾いてしまった道路。
元々は車や人が行き交う道路
だったのに、こうなっていし
まうと車で通るのも怖いです。
このような現場を実際に見る
と、大自然の前には人工物は
無力な存在であると思ひ知ら
れます。しかしそんな中では
も安心して暮らすためには
まず住宅の確保が必要で
すから、家を守るために現代の
基礎構築や地盤改良がいかに
大事かを痛感しました。

これから建てる住宅を守る
ためにも、弊社でもよりシ
ビアにお客様の敷地を検分
する必要があります。



山下が小さく感じるほど
大きく道路が割れる



津波被害(珠洲)

津波の被害により道路が
割れ、地震が起きるまで
建っていた建物は見る影も
なく崩壊。
港へ行く道も瓦礫や泥に
覆われており、通ることも困
難な様子が見て取れます。
この地の被害はとても大き
く、道路の亀裂も人が入れる
程大きく割れています。
地震発生からこれだけ
経っても、復旧の兆しさえ
見えないでいると現地の方
が話してくれました。

石川県の観光地の状況を解説(概要)



【珠洲市、輪島市、能登町、穴水町、志賀町、七尾市】
被害が大きく、復旧に時間がかかります

【中能登町、羽咋市、宝達志水町】
一部の施設等において被害が見受けられますが、
復旧を進めています
→施設など通常運営を開始しつつあります

【加賀地域】
被害がある地域は少なく、
ほとんどの地域は日常を取り戻しています
→施設などはほとんど通常運営しています※
※一部の施設では、休業や限定営業をしているところもあります。
詳しくはHPなどでご確認ください。

ほとと石川旅ねっと
https://www.hot-ishikawa.jp/feature/detail_239.html



海岸隆起

地震が来る前は堤防まであった
海岸。地震が起きて1日も経たずに
4〜5mもの隆起があり、景色や
そこに住んでいる人達の生活も
一変してしまった。
想像以上に
自然の力が
勝っていると
感じました。



こんなに綺麗な海岸が…自然のチカラには勝てない



水害

発災から10カ月後（昨年9月21日）、豪雨によって川が氾濫し浸水被害も多く発生しました。写真は川の濁流により土手が削られ、基礎下から川に落ち傾いてしまった住宅です。土手が激しく削られた様子や、土砂崩れが起きた場所を見ましたが、もし鋼管杭での改良工事を行っていたなら、家が大きく傾くほどにはならなかったのではないかと思います。

UFO難しの町

羽昨市には「そうはちばん伝説」という言い伝えがあります。江戸時代の頃、「そうはちばん」と呼ばれる飛行物体が頻繁に目撃されていたと伝えられています。

そうはちばんとはシンバルのような形をした仏具のことで、形がUFOに酷似していることからUFOのことではないかと言われ、羽昨市は「UFOのまち」と言われるようになりました。NASA特別協力の宇宙科学博物館として実際に宇宙開発のために製作された宇宙船や衛生、本物の隕石など多数展示しています。



被災地を実際に視察し、建物の倒壊や地盤の変化を目の当たりにする中で、「地盤がいかに人命と暮らしを守るか」ということを深く実感しました!!

報道では、能登半島地震による液状化現象が確認されたのは2000カ所以上だそうです。

この地震においては、距離が遠く震度5弱以下だった地域でも液状化現象が起きていることから、地震の規模や距離だけでなく液状化には地盤が大きく関係していることが分かります。

また地盤変状がなければ大半の基礎が無被害。基礎がしっかりしていれば、ジャッキアップなどで住宅の傾きをなおすなどの対応で済み続けることができる一方、基礎が破壊された住宅は、取り壊ししか選択肢がなくなります。

しかしながら傾きを直した住宅も、再びおおきな地震が起きれば再液状化により重ねて家が傾く可能性があるため、地盤改良が必要です。

地盤沈下による建物への影響として

- 建物に付いている水道管、水道管の損傷やズレ
- 居住空間の不快感と体の不調（建物傾斜1度で、めまい、頭痛、吐き気など居住困難に）
- 安全性の低下、建物の歪み、構造的な損傷（放置すると更なる損傷）
- 土地が低くなることにより、雨水がたまりやすく、台風や大雨の浸水リスクが上がる

家づくりのスタートを担う、地盤マスター

畑野は静岡県西部から愛知を担当、山本は静岡県中部・東部を担当。主に1日に地盤調査2件ずつ行いながら、二人で現場の情報共有を行う。

西部 畑野調査員

愛知県は基本的に悪い、沼地、田んぼが多い、埋め立て地が多い

2人とも城跡見学や歴史が好き！

創造力が豊か！

地盤調査1日2件を担当！

東部 山本調査員

溶岩にあたっているのか、地層⇒違うポイントがとまっている

私たちは地盤調査員が見ているデータと、お施主様にお渡しする地盤調査報告書では、情報の精度が異なります。報告書は25cmごとのデータをもとに作成されますが、実際の現場では1cm単位で地盤の変化を感じ取っています。

ときには判断が難しいケースもありますが、その際は追加調査で範囲を広げたり、打設時の手応えや地中の様子をイメージしたり、過去のデータと照らし合わせながら慎重に見解を出していきます。常に「**できる限り正確な調査を**」という想いで現場に立っています。

地盤の安全性を判断するうえで、周囲の地形も重要です。たとえば、近くに川がある、山が迫っているなどの情報もリスク分析の大切な要素です。特に注意すべきは、液状化、地すべり、隆起といった現象。

地盤改良工事によるリスク軽減が不可欠だと感じています。

調査のあとは、改良工事チームへ正確な情報を引き継ぐことも私たちの役目。砕石パイル、鋼管杭、コロンブス工法など、地盤の状態に応じた最適な工法を提案し、擁壁との距離や建物の配置など、現場特有の情報も細かく伝えるようにしています。

今回の被災地視察を通じて様々な現場を見ることができ勉強になりました。

地元に戻り、いつもの地盤調査の仕事をついたときに

「測るだけじゃない、守るための仕事。」

データに向き合い、土地の個性を読み解く。人の暮らしを見えないところから支える、「地盤のプロ」だと確信しました！